□追悼文□

故初山泰弘先生を悼んで（名誉教授　初代大学院長）

故初山泰弘先生（初代大学院長）

名誉教授・大学院長
初山泰弘先生の死を悼んで

木村　哲彦
大学院　リハビリテーション分野教授

初山泰弘先生は，国際医療福祉大学の初代大学院長として，博士誕生の軌道に乗るまでの 5 年余を本学の為に御尽力下さいました。病を得，大学院に於ける重責および多くの国家的な公務を退かれて半年後の平成 16 年 10 月 13 日，皆から惜しまれつつ奥様に見守られながら安らかに黄泉路に旅立たれました。1931 年生まれの 73 才，左耳下腺癌の結果でした。手術を数回に亘って受け，再起を期待されながらのお別れでした。葬儀は先生の生前からの御意志に沿って，御会葬頂く皆様方各個人の帰依するところの宗教を尊重し，分け隔ての無いように無宗教で執り行われました。初山先生らしいお考えを全うされた結果でありました。中身の濃い大学院長生活でありました。

『若き日，末梢神経の研究者としての時代』

初山先生は，九州大学を卒業後，東京大学の整形外科学教室に入局され，整形外科医としての修練を積みながら，多くの肢体不自由の原因となる末梢神経疾患・損傷の研究に励み，多くの業績を上げられました。無論整形外科医としての臨床経験も豊富で，関連の学会報告も数多く，誌上発表も多く成されています。

『国立リハビリテーションセンター立ち上げ準備から完成までの時代』

此処からがその後の先生のライフワークともなったリハビリテーションに関連する医学的問題から行政に関する問題，更には境界領域に及ぶ広範囲の問題に手を染められる事になった方向変換の岐路でもあります。在京の国立リハビリテーション三施設，国立身体障害センター，国立聴力言語障害センター，国立視力障害者センターの統合移転が昭和 40 年代の後半，当時の厚生省で具体化が進んでいました。そこで新進気鋭の学究の徒であった初山先生に白羽の矢が立った訳です。センター病院の医務課長としてリーダーシップを取ることになった先生は，成人障害者のリハビリテーションセンター構築の設計素案作りのために，欧米各国の情報蒐集の視察に出掛け，昭和 54 年統合移転を済ませた国立身体障害者リハビリテーションセンターの構想に生かされる所と成った訳です。当時の厚生省は，障害児を除く，社会局の所掌する総ての障害者のリハビリテーションに関わるサービスを総て一箇所で完結させる一大施設を完成させました。現行法下で言う「身体障害者病棟」，「回復期リハビリテーション病棟」の基礎になったとも言うべき病院も併設させる事になりました。この裏に初山先生の絶大な努力が存在した事は等しく関係者の認める所です。

リハビリテーション元年と言われた昭和 40 年当時から漸くリハビリテーション技術に関して一定の水準に手の届くところまで来ていた日本でしたが，リハビリテーションチームという考えは定着して居らず，日本国内に 10 箇所程度でしかなかったリハビリテーションセンターの職員間情報交換

の為の会を自ら中心になって働き掛けをしたのも初山先生でした。昭和 54 年春，所沢の地に移転をするまでの間は障害者スポーツも，医･工連携も，社会福祉との連携についても，基礎作りと根回しの時期であったと申せましょう。

移転の翌年昭和 55 年（1980）肢体，視力，聴覚言語の三施設統合が完成し, 研究所, 病院のヘッド, そして本大学大学院長として着任される迄, 国立センター総長としてご活躍なさる所と成りました。

『国際医療福祉大学に赴任される迄の 20 年』

1981 年はちょうど国際障害者年，それからの 20 年間，多くのご活躍の場が待っていました。WHO との関係もより密に，JICA 医療協力の問題，補装具関連，教育，行政，スポーツ，境界領域，そして本来のリハビリテーション医学, と大田原に赴任される迄に国際的にも数多くの足跡を残されました。

1981 年以降, 最後の論文, 141 号（2004 年 5 月），総説「障害ある人々のスポーツの歴史と展望」リハビリテーション医学，迄に 74 編が文献検索でリストアップされます。この内訳を見ますと，「義肢装具･福祉用具関連」が 34 編，「身体障害スポーツ関連」が 13 編，「リハビリテーション医学関連」は 9 編，「行政関連」が 6 編，そして「神経」，「境界領域のリハビリテーション関連」，「中国リハビリテーションセンター職員教育を含めたリハビリテーション教育関連」各々4 編と本学の学部および大学院教育に関連の深いものがほとんどです。また，現在各方面で使われているものに限っても成書・教科書の類は 10 種以上におよんでいます。

『本学大学院長に就任されてから』

勿論講義も院生の指導にも当たられ，教授としての任務も果たされましたが，それ以上に国際医療福祉大学の代表として，或いは日本国を代表する立場で IUHW のロゴマークと日の丸を背に大活躍をされました。

WHO・日本リハビリテーション協会関連：前任地のリハビリテーションセンターが WHO の Collaborating Centre として機能していた事とも関連がありますが，WHO 関連の会議には本学に移られてからも各種の委員会に出席され，日本を代表する立場で国際会議に出席し発言されました。最近のイベントとしては，国際セミナー，主催 2003.2.8「日・英で進める地域に於ける障害者･高齢者支援」に於ける主催者演説では参会者に大きな感銘を与えました。

IPC（International Paralympic Committee）：身体に障害を持つ者の為の医学的根拠に基づいたリハビリテーションの手段として，また健康寿命延伸，介護予防，更には市民スポーツ，社会参加促進に役立つ競技スポーツ，と広い意味に於けるリハビリテーション推進の為に日本身体障害者スポーツ協会の医学委員長を長年に亘って勤められました。日本の代表として国際パラリンピック委員会に出席される機会も多く，国際的に障害者スポーツの発展に尽くされたのです。その結果 IPC の最高位勲章である「パラリンピックオーダー」を受賞されました。昨 2004 年 1 月 22 日の事でした。

JICA（国際協力機構）関連：現在，国際医療福祉大学では挙げて中国リハビリテーション研究センターに対して技術援助（先方の JICA オフィスに常時教育専門家を駐在させて，実地指導を行うと共に首都医科大学内に設置した教育所において専門教科を担当している）を実施，また先方からの留学生を受け入れ，指導者の育成に努めています。これは，1982 年以来初山先生の前任地に於いて発足した国の事業を引き継いだものであり，各方面から高く評価されると共に大きな期待を寄せられています。勿論その他のファンドを利用しての各国の留学生も学部および大学院において数多く学んでいることも大きな特徴と言えます。

厚生労働省関連：身体障害者福祉審議会委員，テクノエイド協会，リハビリテーション協会，障害者スポーツ協会等々，数多くの福祉・リハビリテーション領域の公的委員を歴任され社会貢献をして下さいました。

上記の如く，少ない紙面には書き切れない程の多くの社会貢献を通して，わが国際医療福祉大学の存在を世に示して下さいました。本大学に席を置く者の全てが感謝の念と哀悼の念を持ってお別れを申し上げる次第です。合掌

初山先生の思い出

笹沼　澄子
国際医療福祉大学名誉教授

初山先生に初めてお会いしたのは，本学待望の大学院創設に伴い先生が初代院長に就任された 1999 年春のことでした。以来，大学院教育の基礎づくりに精魂を傾けられた先生の許で，保健医療学専攻主任のお役目を 2 年間にわたって果たさせていただくという，またとない幸せに恵まれました。

先生は，本学における大学院教育の目的が本学創設の基本理念を踏まえたものであることを強調され（大学院情報 2000，‘Message’参照），その実現に文字通り全力投球で立ち向かわれました。開学早々の課題には，保健医療学専攻の 5 分野から成る一期生 34 名が各々の目標達成に向けての教科履修や修論研究に集中して取り組むための様々な‘基盤整備’も含まれ，院長招集の月例「打合わせ会議」での緊急討議対象となりました。L 棟 3F の院生研究室の整備，必須図書・学術誌の調達と文献検索の効率化などがこうした緊急項目にのぼったのもこの頃でした。

第 2 年目を迎えての最優先課題は言うまでもなく一期生 34 名全員を第 1 回修了生として送り出すことであり，修論指導にも一層の熱が入りました。初年度からスタートした年 3 回の M1 研究報告会に M2 報告会が加わり，いずれも午前・午後のまる一日をかけて行われました。会場 F101 の最前列に陣取られた初山先生は，5 分野にわたる院生の多彩な研究報告に終始熱心に耳を傾けられ，急所を突いた質疑，コメント，論文完成へ向けてのきめ細かい助言などを一人ひとりに対して丁寧になされ，彼らの士気をもり立てられました。なお，本専攻の博士課程開設に関わる様々な案件も 2 年目の月例会議での重要な検討事項となりました。青柳常務のご参加も得て多くの論議が重ねられ，翌年の博士課程開設に実を結びました。

このように本学大学院教育の基礎づくりに心血を注がれると同時に，国際パラリンピック委員会委員をはじめとする海外での幅広いご活躍にも時間を割かれるなど，国の内外での重責を果たされていた先生は，一方で，この上なくおおらかで friendly なお人柄の持ち主でもあられました。先生を知る人々の中にはこうした先生の一面を反映する心温まるエピソードの数々を体験された方が少なくないのではと思われます。

尽きることのない先生の思い出の一端をここに綴らせていただきながら，改めて人間初山先生の偉大さに思いを致し，先生のご偉業がわが大学に末永く継承されますことを衷心より祈念して追悼の辞とさせていただきます。

初山先生の思い出

杉原　素子
国際医療福祉リハビリテーションセンター長
保健学部　学部長

初山泰弘先生がいろいろな場面で挨拶をされる時，私はいつもその理路整然としたお話の内容に聞き入っていました。無駄な言葉は一つもなく，気持ちをいくぶん高揚させて話されるお姿を今でも容易く目の前に映し出すことができます。初山先生のあのご挨拶の仕方を少しでも真似てみたいと願っておりましたが，それもできずにお別れすることになってしまいました。大学構内のリハビリテーションセンターのセンター長として，那須療護園長として，また大学院長として私は様々な場で，数多くの教えを初山先生から受けました。どんなにお忙しい時であっても常に，笑みをたたえながら耳を傾けてくださいました。那須療護園の入所者は皆一様に初山先生を尊敬していました。その理由は，初山先生の誠実な，言い換えれば誰にでも違えることのない誠意ある態度や行動をとられることを身近に経験していたからだと思います。

初山先生は元国立リハビリテーションセンター総長という立場から，本学の中国リハビリテーション研究センターとの研究プロジェクトに積極的に参加されずっと支えてくださいました。それは初山先生の前任者でもあった津山直一先生の熱い願いでもあったと思われます。その津山直一先

生も平成 17 年 2 月に亡くなられました。黄泉の国で今，お二人はどのようなお話をされているのでしょうか。初山泰弘先生，頂いたたくさんの教えを忘れずに，障害を持つ方々と，共に語り合いながら歩んで行くことをここに誓います。

初山先生の思い出

嶋田　裕之
前・基礎医学研究センター長

僭越ながら元基礎医学研究センターに所属していたものとして，初山先生の追悼文を記します。平成 12 年に本校のキャンパスに大学院棟（L 棟）が完成し，2 階に基礎医学研究施設が開設されました。しかし，研究施設は設置されたものの，すべてがゼロからのスタートで，どのように運営・対処してよいのかわからない困難なことも多々ありました。このような時，基礎医学研究施設の運営，動物実験の倫理審査などについていつも相談に乗ってくださったのが，初山先生でした。初山先生は学科長会議で基礎医学研究施設に関して議事を挙げてくださり，施設のシステム作りにお骨折りくださいました。初山先生ご自身も月に一度の基礎医学研究施設運営委員会には可能な限りご出席くださいました。初山先生のご尽力のお陰をもちまして，本学にも「基礎医学研究」が根付き始めました。なによりも初山先生が喜んでくださったのは，2001 年度・基礎医学研究施設研究報告書がでたときです。先生のご挨拶の最後のお言葉ですー「この報告書を機に，基礎医学研究部門がさらに充実し，将来報告書の文献が各分野で引用されるようになること，さらに，これは大変難しいことかもしれませんが，教職員・学生に開かれた研究部門となることをお祈りし，ご挨拶といたします」。

初山先生，今まさに，L 棟での幾つかの仕事が国内外で高い評価をうけています。難しく思われたことも，難しくなくなりつつあります。

感謝と哀悼の念でいっぱいです。有難うございました。

初山先生プロフィール

生年月日　昭和 6 年 10 月 30 日

本籍地　東京都

学歴

昭和 31 年　3 月	九州大学医学部医学科　卒業
昭和 40 年　3 月	医学博士学位取得（第 548 号　東京大学）

主な職歴

昭和 32 年　4 月	東京大学医学部附属病院整形外科医局
昭和 34 年　1 月	東京大学医学部助手
昭和 38 年　3 月	日本肢体不自由児協会整肢療護園診療医長（兼）肢体不自由児療育技術者養成所講師
昭和 40 年　9 月	国立甲府病院整形外科医長
昭和 44 年 10 月	東京都立墨東病院整形外科医長
昭和 47 年　5 月	国立身体障害者センター医務課長
昭和 54 年　7 月	国立身体障害者リハビリテーションセンター病院診療部長
昭和 56 年 10 月	国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所長 （兼）病院診療部長
昭和 60 年　4 月	国立身体障害者リハビリテーションセンター更正訓練所長 （兼）研究所長
平成 4 年　4 月	国立身体障害者リハビリテーションセンター総長
平成 11 年　4 月	国際医療福祉大学大学院院長 （兼）研究科長
12 月	国際医療福祉リハビリテーションセンター　センター長
平成 13 年　4 月	社会福祉法人　邦友会　身体障害者療護施設　那須療護園施設長
平成 15 年　3 月	国際医療福祉大学大学院院長退職
平成 16 年　4 月	国際医療福祉大学　名誉教授（永年）
平成 16 年 10 月 13 日	ご逝去